慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東京大学国文学研究室蔵「照日の前」翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1992
Jtitle	三田國文 No.16 (1992. 6) ,p.23- 40
JaLC DOI	10.14991/002.19920600-0023
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19920600-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東京大学国文学研究室蔵［照日の前］翻刻

石川　透

例言

一、本翻刻は、東京大学国文学研究室蔵［照日の前］中・下である。

一、本作品は、外題・内題ともなく、題名は、東京大学国文学研究室の目録、並びに「訂増室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』）等に依った。また、内容からみて、現存の二冊は、上中下三冊本のうちの中・下巻であると推測し、その巻号を付した。

一、本作品の内容については、拙稿「『照日の前』の諸問題」（『江戸川女子短期大学紀要』第八号・一九九三年三月）等を参照していただきたい。

一、本書の書誌は以下の通り。

［照日の前］（中・下）

番号、中世三五・三、三八

形態、袋綴・横型奈良絵本、二冊

時代、［江戸前期］写

寸法、竪一六・六糎、横二五・五糎

表紙、紺色表紙

外題、なし

内題、なし

料紙、斐楮交漉紙

丁数、中・四〇丁、下・三九丁

挿絵、中・七頁（内二頁欠）、下・七頁（内一頁欠）

行数、半葉一二行

字高、一三・〇糎

奥書、なし

印記、「月明荘」（朱）

一、翻刻に際して、次の方針をとった。

1　本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。

2　私に句点・読点・「　」等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかった。

3　本文上の意味不明箇所等には（ママ）を記した。

4　底本の丁数は、その頁の末尾に（　）をもって記した。
5　挿絵は［　］で示した。

一、最後に本書の閲覧と翻刻掲載の御許可を賜った東京大学国文学研究室に厚く御礼申し上げたい。

［照日の前・中］

正月もすき、きさらきはしめのことなるに、ひらのゝさゑもんかねとしは、都の大ばんつとめんため、三十よきにて、上らくせんとしたまふ。すてにはや、御やかたを出給ふ時、姫君のすみ給ふ、にしのたいにうつり給ひて、のたまふやう、「いかにや、ひめきみ、聞給へ。われ、御身をおもひ奉ることは、月日のことくに、あふき奉りけり。しか（1オ）るに、三とせかあひた、たれにあつけをくともなく、とゞめをきまいらせて、都にのほらんことこそ心うけれ。さらば、うしろやすき母も侍るにこそ。さりとて、おほやけの御事を、わたくしにはからふことも、かなひかたければ、まつ〳〵都へのほる也。たとひ、ざいきやうのあひだなりとも、都よりこゝまては、わづか一日二日の道なれは（1ウ）おり〳〵のたよりにつけて、たかひに御文をもみゝえまいらすへけれは、くるしからす」とて、涙とゝもに出給ふか、立かへり、めのとの女はうに仰けるは、「かまへて〳〵、ひめ君の仰にたがふことなかれ。みつからなけれはとて、あしくばしあたるな。はゝもたぬひめなれは、よろつおことをこそ、たのみても跡にとゝめてはのほれ」とのたまひて、（2オ）なく〳〵都へのほられけり。

ひめ君の御心の中、をしはかるへし。あまりになけき給ひけれは、二三日がほとは、物も参らでうちふさせ給へは、女ばうたち、あさましく思ひて、とり〳〵にすかし奉りけるほとに、すこしは御心もなをりけり。

かくて、日かずをふるほとに、かのそらことつくりし、しのふといふ女ばう、いまはよき折ふしと（2ウ）思ひ、すけ殿のやかたに参りて申けるは、「いつそや申上しやうに、ひめ君の御ちゝは、さんぬる月、御上らくまし〳〵て候也。ひめ君のすみ給ふにしのたいは、人めまれなる所にて候へは、ひそかに、かの所へ御出候へかし。みつから、まちうけまいらせて、ともかくも、よからんやうにはからひて見申さん」といひけれは、すけ殿、おほきによろこはしげ（3オ）にて、すなはち、時こくをさため、しのぶをはかへされけり。

すてに、その夜も、やはんはかりの事なるに、兵衛佐殿は、はい所のやかたをしのひ出、ひめ御ぜんのすみ給ふ、にしのたいに立入せ給ひつつ、かいまみ給へは、ひめきみは、いまたいね給はす、めのとの女ばうと、むかし物かたりしておはします。その御すかた、たうりの、春の風に（3ウ）ほころひ、かいだうの、つゆをふくめるかことし。せんげんたる両びんは、秋のせみの羽にもたり。えんでんたりしさうがは、遠山の色にあひおなし。ふようのまなしり、うつくしく、けんろのおとかひ、ほそやかなり。御てのつまさきにいたるまて、玉をのへたるかことくなり。五つかさねのこうちきの下に、ねりのひとへをめしたる御よそはひは、この世の人とも（4オ）見え給はす。すけ殿、ひめ君のえならぬ御すかたに、めもととろき、はしりも

ゆかんと、思はれけれとも、心に心をあらそひ、人々のしつまるほとをあひまちて、こしはのかけに、たゝすみゐ給ふ。（4ウ）

［挿絵・第一図］（5オ）

やこゑのとりもつけわたりけれは、人々、ねやに入けり。れいのしのぶは、いまたねやにいらす。かねてたくみし事なれは、姫君のふし給へる、御まくらもとなるあふらひを、ほそやかにして、こしはのもとに立いでてみけれは、すけ殿、こゝに、つゆにしほぬれておはしたり。しのふ、もし人やきくらんと思ひけれは、中〳〵に物もえ（5ウ）いはす。中将殿のそてを引、つまどのうちへいさなひ入て、そのゝち、わか身もねやに入てふしけり。兵衛のすけ殿は、そこともしらぬやかたのうちへしのひ入、たゝすみておはします。「こはいかに成ぬるうき身そや」と、ぜんこもさらにわきまへ給はす、あきれたるふぜいなり。

かのさい五中将のいにしへ、二条のきさきをこひ奉り、（6オ）かんなりさはぐ、いたしきの下にしのひゐて、月やあらぬ春やむかしとなかめしも、我身のうへにしらゆきの、きゆる心地はし給へとも、しはし心をとりなをし、夏のむしの、火に入て、身をいたつらになすことも、こひぢのやみにまよふゆへなり。みつからも、たとへは、いかなるうきめにあふとも、てる日の姫ゆへと思ひなは、（6ウ）うらみとさらに思ふまじとて、心をしつめ、うちの方へ入給へは、あふら火ほのかに見えにけり。ひかりのかけに、あたりをみ給へは、まくらびやうぶをたてゝ、ふし給ふ人あり。これなんひめ君ぞと、かくれなかりけり。おりふし、あたりに、よりふししたる人もなかりけれは、うれしさかきりなし。まくらひやうぶのみぎりに立より、（7オ）ふし給へる御すかたを御覧するに、こほれかゝりたるひんのはづれより、にほやかにほのかなるかほはせ、つゆをふくめる花の、あけほのゝ空、風にしたかへる柳の、ゆふべのけしき、よきにだにも、たへさるかたちは、春の風、一へんの花をふきのこすかとうたかはれ、こうふんをことせるかんばせは、あきの雲、はんかうの月をはき出す、（7ウ）よそほひゑにかくとも、ふてにもいかてをよふべき。よそなからほのかに見てしかたちの、世にまたたぐひもあらむと、あやしきまてに思ひしは、なをかすならさりけりと、見ゐ給ふに、心もはやほれ〳〵となりて、しらす、わが玉しゐの、そのそての中にや入ぬらんと、ある身ともなくおほえ給へは、しとねのうへにより（8オ）そひ給ひけるに、ひめきみは、おとろき給ひたるかたちもなく、のとやかにもてなして、やはら、きぬひきかづひてふし給ひたるけはひ、いひしらす、なよやかにみやびやかなり。

すけ殿は、ひめ君のおなしまくらにふし給ひて、ありしなからの心つくし、あはれなるまてにきこえさすれは、ひめ君は、いらへもし給はす。（8ウ）たゝ思ひにしほれたるそのけしき、まことににほひかうして、花かほに月かすむ夜の、たまくらに、見はてぬゆめのおもかけある御心まよひに、あくるもしらす、かたらひ給へとも、なをつれなきけしきにてほとへぬれは、をのかつはさをならへなから、人のわかれをもおもひしりぬ。やこゑのとりもつげわたり、涙のこほりとけ（9オ）やらす。きぬ〳〵もひやゝかになりて、たぐひもつらきありあけの、つれなきかけに立かへらせ給ひけり。

やかたにかへりいらせ給ひても、ひめ君のほのかなりし御お

もかけの、なをこゝもとにある心まよひに、世のうきわさをもわすれ、くさのをふといふうらのあたりにも、たつねゆきなましと、そゞろに思ひしつみ給へとも、ひるは人め（9ウ）もしげけれは、夜ふけ、人しつまる比になりて、かならす、しのひてかよひ給ふが、はや、しぢのはしがきもゝ夜までに成ぬれは、ひめ君、おさな心にも、あはれなるかたに御心ひかれて、のほれはくだるいなぶねの、いなにはあらすと、思へるけしきにおはしけるか、あまりつれなかりし心のほと、我なから、うき物におほし返して、（10オ）むすびをかれし心のしたひぼうちとけて、さよのまくらをかはしまの、水の心もあさからぬ、御ちきりなり。

すけとのゝ御心の中、このいく日かすをかさねて、たまにあふ夜のうれしさ、うどんけの春まちえたる心地して、さんごのきのうへに、やうたいのゆめ、とこしなへにさめ、れんりの枝のほとりに、りさんの花、こま（10ウ）やかなり。いきては、かいらうのちきりふかく、しゝては、おなしこけの下にもと、おほしめしかよはしけるけしき、さすか、かくれなかりしかは、めのとの女ばう、見まいらせ、「こはあさましき御ことかな。ちゝごのきこしめされなは、いかなる御はからひかあらん。はゝ御せんおはしまさねは、ひとへにみつからか、いさめをこそ、もちゐ給ふへき所に、（11オ）おひたるものゝ申ことをは、一つも御せういんましまさで、御心のまゝにふるまひ給ふこそ、うたてけれ。かの源氏、女三のみやの、かほる大しやう、もうけ給ひしにはようかはりて、ちゝごにまて、はぢをあたへ給はんこそあさましけれ」と、おどしすかしいさめけれとも、あやなくまよふ御心のみち、のちのわさはひをも、かへりみ給はす、めの（11ウ）とかいさめも、御みゝにいらすして、しのひ〳〵にかよはれ給ふ事、十月にもなりけれは、ひめ君の御けしき、たゞならすなり給ふ。

めのと、此よし見まいらせ、「みつからか、申つることよ。ちゝさゑもん殿の御上らくのとき、かへす〳〵申をかせ給ふことの侍るものを、ひめ君の御大事あらむには、みつからこそ、御かんだうをかうふらめ。なさけな（12オ）の御しわざや」と、なげきかなしみけるほとに、ひめ君は、つゐに月比みちけれは、たいらかに御さんのひもをとき給ふ。とりあけ見給へは、玉をのへたる御わかきみにて、おはしましけり。ひめ君、御心にはうれしくおほしけれとも、さすか、しのひてまうけ給ふ御子なれは、めのとかみる所をはぢて、さらぬていにもてなし給へり。（12ウ）

［挿絵・第二図・欠］（13オ）

めのとの女はうは、かやうのことを見るにつけても、むねのやすまることもなし。さゑもん殿の御ざい京も、やう〳〵三とせにみちけれは、いまはゝや、御くたりもちかつき侍りけれは、ひめ君の御ことを、「いかに」と御とひあらは、みつから、その時、こたへ侍らんこと葉なし。とかくうき世にすめはこそ、なげきもかなしみもあれ。とてもすみ（13ウ）はつましき世なれは、いまのみきりをよきぼだいのたねとなして、後生ぼだいをいのらはやと思ひつゝ、とし四十八と申には、みつからかみをきり、こきすみぞめに身をやつし、とんせいしゆぎやうに出たりしか、後には、たうごくほつけ寺に、おこなゐすましてすみ

侍るとそきこえし。
　めのとの女はう、かくなりしかは、かの御中だちし（14オ）たりし、しのふと申女ばう、きり人にて、おもふまゝにはからひけり。これをみるうちとの女はうたち、くち〳〵に申けるやうは、「いたはしや。とうさいもしろしめさぬひめきみを、そゝなはしまいらせ、たゞいまに、うきめにあはせ奉らんことのあさましさよ」と、ことをまつように思ひゐたりけり。
　都にまします、ちゝのさゑもんかねとしは、（14ウ）かやうのことをは、いかてかしろしめさるへき。なれは、ざい京のそのほとも、姫君の御ゆくすゑ、とやかくやとあんじめくらせ給ふか、ことしは、はや十六さいになり給ふとおほゆれは、いかならん人にも見せまいらせはやと、色にこそ出さらね、御心の中には、やるかたなくそおほしめしける。
　その比、をとはの大納言まさつなと申けいしやう（15オ）の御子に、をとはの中将清綱と申人おはしけり。その比、はりまのこくしに、すはり給ふへきよしきこえけれは、兼俊朝臣、かのやかたに参りて申されけるやうは、播州きぬかさの住人、ひらのゝ左衛もんかねとしと申ものにて候か、こくし、近日御下かうあるへきよしうけ給はり、御げざんのそのために、これまて参りて候よし（15ウ）申入させ給ひけれは、中将いかゝ思はれけん、もんぐはいまて立出て、かねとしをしやうして、きやくざになをし、ねんごろにしきだい立給ひけれは、さゑもんは、おそれ入給ふ事かきりなし。（16オ）
［挿絵・第三図］（16ウ）
中将、大きにかんじ給ひて、さんかいのちんぶつに、こくどのくはしをとゝのへ、しゆをさま〳〵にすゝめ給ひけり。そのゝち、こかねつくりの太刀一ふり、とり出し給ひて、かねとしに給はりつゝ、「このたちと申は、みつからがせんそよりつたへたる、てうほうにて候へとも、御へんにこれを奉る。ざいこくのおりふしは、なにごともたのみ（17オ）奉るへし」とのたまひけれは、さゑもん、おほきによろこひて、三といたゝき給ひけり。「いかさま、御下かうのおりふしは、御ほうこう申奉るへし」、いとま申て「さらは」とて、わか宿所に立かへり給ひぬ。
　さるほとに、三とせの大ばんすきけれは、さゑもんのぜうかねとしは、君の御ゆるしをうけ給て、わがほんごくにかへられけるか、いそぎ、ひめ君（17ウ）のおはします、にしのたいにいらせ給ひて、ひめ君にたいめし給ひけり。おほしめしつるにもまさりて、ひめ君のおひたゝせ、いとうつくしくおはしますをみ給ふにも、母のとのかた、いまだなからへてましまさは、いかはかりうれしくおもひ候はんものをと、思ひめくらし給ふにも、いとゝふびんにおはしけれは、そゞろに涙を（18オ）なかされけれは、ひめ君は、また、兵衛のすけに名をたてられし事、わかをまうけし事、ちゝのきこしめすならは、いかはかりうきめをみんすらんと、おそろしくおほしめすにつけても、ほしあへぬ御涙なれは、ちゝは、かくとも、ゆめ〳〵しろしめさす、あはれなるありさまにて、やかたにかへり給ひけり。
　そのゝち、こくし（18ウ）中将きよつな卿、くだらせ給ひけれは、十四ぐんの侍たち、一日路まて御むかひに参りて、賀古のこほりに、やかたをつくりてすへ奉り、いつきかしつき奉る。中にも、きぬかさの左ゑもんは、都にて、ふかくけいやくあり

けれは、しよ人にすくれて、御ほうこう、いとねん比なり。
かくて、月日をふるほとに、めん〳〵申されけるやうは、（19オ）「たうごくのこくし中将殿は、いまたみだい所もおはしまさぬゆへに、御心のなくさみたまふよすかもなし。いかならん人にも、おほしめしつかせ給へかし」と、とり〳〵さま〳〵に申合て、むろ、兵庫、こやのゝかたより、ゆふにやさしきゆうくんともを、あまたよひくたし、御しやくをとらせ、いまやうをうたはせなとして、こくしをなぐ（19ウ）さめ奉れとも、これにも御心をなくさめ給へるけしきも見え給はす。たゝ、あけてもくれても、みなみおもてのせんざいにのそんて、風にうそふき、月をもてあそひ、心をすましておはしけり。
ある夜、また、たうこくのゆみやとりに、あさばの庄司まさゆきと申老人、国司御前に参りて、御物かたりして、なくさめ奉（20オ）るつゐでに、兼俊のむすめ、てる日のひめの事を申出したりけれは、こくし、このよしきこしめし、御いろにふけるけしきにみえ給ひぬ。「さらは、左衛もんか宿所へ、つかひをたてゝめされはや」と申けれは、こくし、なのめならす御よろこひありて、やかて、御せうそこあそはし、すなはち、まさゆきを御つかひにて、左衛もん（20ウ）のしゆく所へつかはし給ふ。
まさゆき、かねとしにたいめんし、こくしよりの仰のおもむきいひふくめ、御せうそことりいたして奉りけれは、さゑもん、このよしうけ給はり、「仰のことく、それかしがむすめは、みめかたち世にすくれ、ゆうにやさしく侍れは、いかなる上らふたちにも、見せ申たく候つれとも、母かわすれかたみともみ申さんために、（21オ）いま十六になるまても、かゝへをきてこそ候へ。しかるに、こくしのみだい所と、かしづかせ給はんとの仰せ、身にあまりて、かたしけなく存候へとも、はじめより申やうに、いへをはなれて人にみせんとは思ひもよらす。そのうへ、ひめかことをしたはせ給はゝ、おほそれなから、こなたへ御出候て、たがひの御たいめんあつてのうへに、ひめか心を（21ウ）もとらせ給ひてのうへには、ともかくも仰にしたかひ候へし。かやうに申せは、こくしをかろしめ奉るにたれとも、たゝ一人のひとりひめか事にて候へは、おほしめしやらせ給ふへし」とそ、のたまひける。
庄司、このよし聞て、こくしの御まへに参りつゝ、いさゐに申上けれは、こくし、いとゞあくかれ給ひて、「此うへは、さゑもんか申むねに（22オ）まかせて、かれかしゆく所へゆくへし」と、のたまひけれは、庄司、「しかるへし」とそ申ける。
こくし、左衛もんのしゆく所へ、御出あるへきよしきこえけれは、左衛もん、めんほくに思い、にはのちりとらせ、あひまちけり。すてに中将殿いらせ給ひけれは、左ゑもん出あひ、とり〳〵になくさめ奉る。かねてよりやくそく申せし事（22ウ）なれは、かのにしのたいへ、御とも申て入奉り、中将殿、ひめ君のありさまを見給ふに、せんげんたるようしよくの上に、きんすいをかさり、こうふんをことゝし給へは、よう〳〵たるたうくはの、あかつきのつゆをふくみ、せうさつたるやうでうの、春風になひくふぜい、あてやかに、らうたけて、わかむらさきのにほひことに、はつもとゆ（23オ）ひのすゑ、いかならんとみるに、心もまよひぬへし。よはひ、すてに二八にも見えしか、

かのぶさんのしん女、雲となりし夢のおもかけ、玉妃、大真院をいてし春のこび、かくやと思ひしられたり。（23ウ）

［挿絵・第四図］（24ウ）

をよそ美人をかぞふるに、天上にては、たいしやくの御むすめ、しやしぶにん、吉祥天女、てんぢくにては、やしゆたら女、せんだら女、大たうにては、殷のだつき、しうのほうじ、えつのせいし、かんのりふじん、唐のやうきひ、わか朝にては、そとをり姫、さいくうの女御、光源氏に名を立しは、おほろ月夜のないしのかみ、さいこ中将にこいられしは、二条のき（24ウ）さき、かしは木のゑもんにこいられしは、女三のみやの御事なり。兵部卿のかよひ給ひしうきふね、うばそくのみやのおさながほ、をのゝこまちがわかざかり、なさけ第一といはれしは、いつみきしぶ也。いろのふかきは、むらさきしきふ也。千人か中にえらまれしは、あやめ、ときわ、まこもなり。鳥羽院のうへわらは、けしやうのまへと申まて、びじんはし（25オ）なゝ〳〵ありけめとも、むかしの世のことなれは、名のみのこりてかけはなし。

われ都にありし時、てん上のましはりをしつれは、女御、かうい、みやす所、ないし、うへわらはにいたるまて、あまたのみめよき上らふたちを、見奉りしかとも、いまた、てる日のひめほとの、ようしよくをはみすとて、ひたすらに、御心をうつされけり。（25ウ）

それよりのちは、をぎのはにつたふ風のたよりにつけ、わすれ草のすゑ葉にむすふ、つゆのかことによせては、いひしらぬ御ふみのかす、はやちつかにも成けれとも、ひめ君は、をもきかうへのさよ衣、終にはうき名たちぬへしと、いとつれなきけしきなれは、ちゝのさゑもんは、このよしを見きゝて、「やんことなき上らふの、なをざり（26オ）ならすの給ふを、などや、いまゝて、御いらへは申さぬそ」と、いといたくわひたまひけれは、ひめ君は、物かなしけにふししつみ給へり。御かほはせ、せきはくとして、涙らんかんたり。名にしほふ、月もうつろふもとあらの、こはぎつゆおもげなり。女郎花はら〳〵とこぼれかゝりたる、びんのはづれより、ほのかに見えたるまゆの（26ウ）にほひ、わか子なからも、心まよふほとなれは、わかき上らふの身として、こひ給ふもことはりなりと、いよ〳〵あはれにおもひて返り給ひぬ。

そのゝち、こくしよりきこえけるは、

いかにせんはつかに人を水のあはのきえかへるともしらせてしかな

とよみてをくり給ひけるを、つかひ、いかゝ思ひけん、ひめ君の御かたへはまいらせすし（27オ）て、さゑもんとのにそわたしける。さゑもん、このよし御覧して、松かねと申女はうをめされて、仰けるは、「なんぢ、ひめ君に申へきようは、こくしの仰をそむき奉ては、このくにのすまゐかなふまし。そのうへ、ひめか事は申にをよはす、ちゝも御ふしむかうふるへし。さあらんにおゐては、五きやくの人にあらすや。よからんやうに（27ウ）御返事をつかまつり、こくしの御心をもなくさめて、ちゝかゆくゑも、あんをんならんやうに、はからふへしと申せ」とのたまひけれは、松かね、ひめ君の御まへに参り、ちゝ御の仰をくはしく申つゝ、「いとゝだに、女人は五しようのつみふかき

とうけ給はるに、ましていはんや、ちゝこの御ふけうかうふらせ給はゝ、うかみ出給ふ事あるまし。よく〳〵（28オ）御しあんあるへく候」と申けれとも、とかくの御返しもましまさす、引かつきてそふし給ふ。

松かねかへりて、左ゑもん殿に、かくと申あけけれは、さゑもん、いとうらめしくおほしける所に、にてうと申みやつかへの女はうの候けるか、さし出て申けるようは、「君はいまたしろしめされ候はすや。ひめ君は、ちゝ御の御ざい京の御あとに、上ら（28ウ）ふをとのにもうけ給ひて、うつくしきわかきみまてを、よろこひ給ひつれは、いかにして、また、こと人にまみえんともおほしめすへき」と申けれは、さゑもん殿は、あまりのことのあさましさに、物をもの給はす。「いかゝはせん」とあんし候へとも、たゝひとりあるむすめの、しかも人にすくれてうつくしけれは、あらき風にもあてしと、そたてし子（29オ）なれは、つらきにもなんだはかはかす。

母かいひごんもわすれがたけれは、ことのしさいをよくきゝて、こくしへ申さんとおほしめし、めのとの女はうをめされけるに、「めのとは、御さい京の御跡にて、いつくともなくかげをかくして候」と申す。「されはこそ、いさめをももちゐぬゆへに、すさめてこそかくれめ。中〳〵のしだいかな」と、くちおしく（29ウ）おもひ給ふ事かきりなし。

よく〳〵きこしめしけれは、なかされ人にあひなれ給ふとなり。わか君は、夕しほとよび給へり。さゑもんとのは、このことをきゝ給ふより、むねひし〳〵とつふれて、おもひわけ給ふこともなかりけれは、引こもりておはしける所に、こくしより

は、たひ〳〵に、さゑもんのもとへ、御つかひをくたされ、「よからん（30オ）左右をまちこそすれ」ときこゆれは、左ゑもんは、「ひめ一人にもてあつかひて、しか〳〵のしさい候へは、よきやうに御はからひ候へし」と、御返事申されけれは、こくし、此よしきこしめし、「かのあさばは、ふるきものなれば」とて、めし出され、「此事いかゝあらん」と仰あはされけれは、政之（まさゆき）、申けるは、「ちよつかんの人にて候へは、めしこめ（30ウ）給ひ候とも、わざはひは候ましか」と申けれは、こくし、「さらば、なんぢをたのむぞ。ともかくも、よきようにはからひて給はれ」と、のたまひけれは、「うけ給はる」と申て、わかやとにかへり、ちやくしの大郎まさみつをはじめて、四人の兄弟に申ふくめ、る人兵衛佐をからめんためにこそ、つかはしけれ。（31オ）

［挿絵・第五図］（31ウ）

こゝにまた、左衛もんのおとうとに、みやざき四郎かねみつといふものありけり。ゆみやをとつて、かうのものなるうへ、花鳥風月のみちにもすきけれは、やさおとこなとゝ人もいひけり。都の人は、こと葉のすゑもかうはしきとて、る人兵衛佐とのゝやかたへ、つねに参りて、物かたりともして、なくさめまいらせけれは、すけ殿も、あさからぬ（32オ）ことにおほしめして、「いなかにも、かゝるやさしき人もあるにや」と、かんし給ひつゝ、ふかくちきり給ふとかや。

しかるに、かねみつ、あさばの庄司か子ともの、すけとのをうかゞひ奉らんと出たつことを、いかゞしてもれきゝきん（ママ）、いそきすけとのゝ御まへにまいり、申けるやうは、「すけ殿は、さることありて、こくしのために御てきとなり（32ウ）給ふによ

つて、からめとり奉らんとのくはたてにて、あさばの庄司か子どもに仰つけられ、これへ、こんやのうちに、よすへきときこえ候そや。御ようじん候へ」とそ申ける。（33オ）

［挿絵・第六図］（33ウ）

すけ殿、このよしきこしめし、いまさら出きたることのように、しうしようのけしきなりけれは、兼光、あまりのあさましさに、「かくては、われらにまてうき目見せ給ふへし。夜にまきれて、このやかたをしのひいで給ひつゝ、あかしのうらへ、おもむかせ給へ。それより、はう〳〵へのびんせん、あまた候へは、御船にめされて、きのぢ（34オ）へおもむき給ふへし。みつからも御とも申たく候へとも、それは、御ためのあしく候へけれは、えんつきせすは、またこそげざんに入侍るへし」とて、涙をなかしけれは、すけとのも、袖をしほり給ひけり。

いたはしやな、すけ殿は、「ひめきみの御ことをは、さていかゝせん。たつきもしらぬ道すからを、たゝ一人、いかにしてかはのかれはつへき。（34ウ）中〳〵に、そこともなきたひのそらにまよはんよりは、こゝにして、とにもかくにも成ぬへし。ひめ君ゆへと思はは、しぬるいのちもおしからし」と、もたへこかれ給ひけるを、かねみつ、いさめ申やう、「仰はさることなれとも、命をまたふもつものは、七世の孫にあふぞかし。うけ給はれは、すけ殿は、いまた、ちゝもはゝもおはしますとこそ（35オ）きくに、いま一たひちよつかんをゆるされ、都にかへりのほり給ひて、ちゝごにもはゝごにも、たいめしたきとは、おほしめさぬか。はや〳〵御いそき候へとよ。じこくうつりなは、うつてもちかつき候はんに」と、いさめけれは、すけ殿、「このうへは、ちからおよはす」とて、あやすげがさにてかほかくし、すみなれさせ給ひたるはいしよを、しのひ出させ（35ウ）給ふか、姫君の御ことを、心にかけておほしめしけれは、名こりはさま〳〵つきせねとも、涙とゝもにいそかれける。（36オ）

［挿絵・第七図・欠］（36ウ）

さてしもあるへき事ならねは、「みぎはのかたはいづくぞ」と、人にとひ〳〵、あゆまれける心のうちこそあはれなれ。夜はまだよひの空なるに、やう〳〵あかしの浦につき給ふ。名にしほふ所とて、月の光はさやけれと、おつる涙にかきくもり、うしをもなみもさなからに、よるとのみみえしなきさのすてをふね、みづ（37オ）からかことくにこそ、こかれて物やおもふらん。

それよりも、磯つたひして、すまのうらにつき、いたやととと候ふはまぢより舟にのり、いつみのさかひにあかり給ふ。こゝにも、かくれすみ給ふへき、よすかもなかりけれは、はしとのもりをうちすぎ、ふどうざかをへて、高野山にのほり、たうらいのちぐうともおぼされけれは、お山（37ウ）に三日とうりうし、院々谷々おがみめくらせ給ふとかや。

そも〳〵御山は、さが天わうの御時に、弘法大師の御さう〳〵、八ようのみねそらにそびえて、上求ぼだいのさうをあらはし、千仏の座八のたにゝそひえたるは、げこうじやうのすかたかや。むらのとほそ、こけとぢて、三ゑのあかつきに月を期（38オ）す、かのひぎやうの三こちにおちて、しるしにおひたる一てうの松、くはいろくのけぶり、ほのかに去て、のきをこがせる御ゑいだう、かうゑんまとを出て、心ほそき鈴のこゑ、きりにこもりて物すさまし。なん天のてつたうを、まなびうつ

せる大たうは、くもにそびえておひたゝし。両かいのまんだらは、この内にかけられたり。（38ウ）さて、大師御入定ありし、おくの院へまうてゝ、おかまへ給へは、れいせう風をふくんて、ゆが上せうのりをあらはし、山花雲をこめて、せきにく中たいのさうをひす。御仏のけゑんは過ぬれとも、五時の説いまみゝにあるかとおぼえ、じそんの出世にはるかなれとも、三ゑのよそほひ、すでにまなこにさえきるかご（39オ）とし。かれを見、これをみ給ふにつけても、お山に心はとゝまれとも、かくてもすみはつましきうき世なれは、なく〳〵下かうし給ひつゝ、きのちにかゝり、千里のはまをうちすきて、くまのゝしんくうにおちつき、ゆあさの庄司をたのみて、しはらく年月ををくられける。

さても、ひらのゝ四郎かねみつ（39ウ）は、しのびて、ひめ君のおはします、にしのたいに参りて、すけ殿の御ことを、なく〳〵かたり出しけれは、ひめ君はきこしめし、「これはゆめかやうつゝかや、さていくつをしるへに出給ふそや。みつからとても、やすからん、うき身にはあらねとも、しなは一所とこそ契りしに、うちすて給ふか、なさけなや」とて、りうていこかれなき給ふ。（40オ）

［照日の前・下］

兵衛佐、ゆきかたしらすなり給ふときこえしかは、こくしのしうしやうなのめならす、みうちの人々も、のちいかならんと、やすからぬ事に思へり。あるもの申けるは、「兵衛佐、左衛もんのむすめにちきりて、一人のわかをまうく。その名を夕しほと申て、ことし三さいにまかりなり候か、かれかおひたちて候はゝ、のちの御（1オ）わづらひなるへし。いかやうにも、御はからひあるべう候」と申けれは、こくし、けにもとおほしめし、かねとしのもとへ、御つかひをたてゝの給ふやう、「る人兵衛佐の男子、なんぢかむすめのはらにむまれ侍るよし、そのきこえあり。兵衛佐のありかきこえんまては、こなたへわたし給ふへき」とのたまひけれは、左衛もんは、おもひ（1ウ）よらさる事なれは、大きにあきれて、かのしのぶをめし出し、事のしさいをとひ給へは、「しはしはつゝみまいらせけれとも、とてもかくれなき事なり。いまありのまゝに申さすは、後のわざはひなるへし」と、さもあらけなく、せめ給ふによつて、はしめおはりのことゞもを、のこりなく申出しけり。

さゑもん殿はきこしめし、（2オ）「さらは、そのなんしを、いかにもして、すかしとりつれてまいられ、もし、さもなき物ならは、よもあんをんにはあらし」と、こと〳〵しけにのたまひしかは、しのふ、此よしうけ給はり、身のけよだちて、おそろしかりけれは、姫君の御まへに、まいりて申やうは、「わか君の御ことを、いかにして、もれきこしめしけん。左衛もん殿、（2ウ）見給ふへきよし仰候。いまはくるしからぬ御ことなれは、御めにかけ申へき」と申けれとも、姫君は、いかにとも返事し給はす。かゝりし所に、左衛もん殿より、女はうたちをして、わか君を御むかへにまいらせらるゝほとに、ちからなくしてわたし給ふ。ひめ君の御心のやるかたなさ、おもひやるへし。

左ゑもん殿は、わか君のあり（3オ）さまの、うつくしく、

かゝやかせ給ふにつけても、さきだつ物は涙なり。これほとに玉のようなるおさなき人を、いかにして、人のてにわたすへき。たとへは涙にはもれきこえ、かねとしかいのちをめさるゝとも、ちからなきしたいなり。このわか君におゐては、あまりにいとおしけれは、とゝめまいらせなんと、ちたびもゝたびおもはれけ（3ウ）るか、中にておもひなをし、「いや〳〵、ひめかいのちたにあらは、子ともは又もまうけなん。なかされ人の子をかゝへをきては、われ人（ママ）のためあしかるへし」とおほしめし、しやていの四郎に、かのおさなき子ヲいたかせ、こくしのかたへわたされける。

この四郎かねみつは、もとよりなさけふかきものなれは、このわか君をかたきにわたし、うしなひまいら（4オ）せんことを、いたはしく思ひ、あるものゝ子に、としのほどよりすかたかたちにいたるまて、わか君とすこしもあひたがはさるかありけるを、もとめ出し、こくしの御手へまいらせつゝ、わか君をは、いたはしなから、かたほとりにすてまいらせてかへりける、なさけのほとこそありかたけれ。

かのひめ君の御めのとは、一とせあまに（4ウ）なり、世をうき物に思ひて、はりまのほつけ寺のふもとに、かすかなるいほりをしめて、おこなひすましてゐたりしか、このほとは、都にようありて、のほりつゝ、かなたこなたおかみめくりて、くたるとて、道にてこのおさなきを見つけまいらせしか、なにとやらん、心にそみていたはしく思ひけれは、いだひてあんじつに（5オ）かへり、よきにはぐゝみ奉るとかや。

いたはしや、あさひのひめ君は、すけ殿にあかぬわかれをし給ひつゝ、つきせぬ御物思ひなりしかとも、せめては、わすれかたみのわか君を御らんしてこそ、うかりし月日もくらし給ふ所に、あへなく、かたきの手にとらはれ給ひしかは、いまはあだなる露の身の、なにゝかゝりてか、しはしもなからふ（5ウ）へきこゝちもし給はねは、夜ふけ、人しつまりて後、ひそかにあやしきすかたに出たちて、すみなれさせ給ひつる、きぬかさのしゆく所を、なみだとゝもに出給ふそあはれなれ。（6オ）

［挿絵・第一図］（6ウ）

かのそらことしたるしのふ、姫君のありさまを、つく〳〵と見まいらせ、「いまた、にしも東もしろしめさぬ人の、うかれ心のおはしましそめしも、みつからかとかそかし。をちこちの、たつきもしらぬみちしはの、つゆしもときえ給ひなは、草のかけなる御はゝ北のかた、さこそみつからをにくませ給ふらめ」と、いたはしくもおそろしくも思ひけれは、（7オ）ひめ君の御せんどをもみとゝけ、おなし野の末山のおくにも、まよひはつへきと思ひつゝ、ひめ君の御あとををふてはしるほとに、のゝむらといふ所にては、ひめ君にをつつきまいらせけり。

ひめ君、このよし御らんして、「みつからこそ、あた人のために、身をいたつらになしはつるとも、おことはなにしにおなしうきめを見給ふへき。（7ウ）はや〳〵かへり給へ」との給へは、しのふは、涙をなかして申やう、「こはなさけなき御事かな。はしめより、ひめきみの御せんとを、みとゝけ奉らむものは、みつからにかきるへしと、思ひまいらせしうへ、御めのとの世をいとひ給ひしかは、いとゝさへ、いたはしく思ひまいらすれは、一日へんしもはなれ奉るへしとは思はす。され（8オ）は、み

つからをすてさせ給ひて、いつくへとてかゆき給ふへき。なさけなき御心や」とて、かきくときなきけれは、ひめ君も涙にしほれ給ひけり。

しのふ、「かくて、こゝにもましましはつへき身にあらす。跡よりおつてのまいる事もこそ侍るに、いそかせ給へ」と申けれは、ひめ君、かなしき中に、いとゝさへ物うき目にもやあふらめと、あぢき（8ウ）なくおほしけれは、しのふとうちつれ、なく〳〵いそかせ給ふほとに、のぐちと申所につかせ給へは、夜はほの〳〵とあけにけり。

むかひをはるかにみ給へは、さと人のあまたあつまり、ねんぶつとなふる所ありけり。ひめ君、此よし御覧して、われはかり物思ふものはありと思へは、よその里にもなけきのあれはこそ、かゝるあはれはあるらめと、（9オ）そゞろに涙をもよほし給ひつゝ、かのあたりに立よりて、里人をちかつけ、こととのしさいをくはしくたつね、とひ給ひけれは、「これは、ゆふべおさなき人のしし給ひたるを、此土中につきこめ、御あとをとふらふなり」とそ申ける。（9ウ）

［挿絵・第二図］（10オ）

ひめ君、このよしきこしめし、むねひし〳〵とつふれて、とかくの事をものたまはす。しのぶ、さしより申けるは、「さて、その御子は、いかなる人のゆかりにて候そや」ととひけれは、里人、このよしうち聞て、ようありけなること葉の末なれは、あはれに思ひて、「されはの事よ。このくにのきぬかさと申所に、兵衛佐とします。と申せし（10ウ）なかされ人の候しか、所のしゆご左衛もんかねとしのむすめに、しのひつゝ、としの三とせをくらしけれは、つゐに一人のわかをまうく。その事じねんにあらはれけれは、兵衛佐は身のをき所なくして、いつくともなくおち行給ふ。さてまた、かのわか君をは、つみあるものゝゆかりなれはとて、こくしよりの御はからひにて、ものゝふとも（11オ）かうけ給はり、ゆふへこの所にて、やいばのさきにかけまいらせ、うちすてゝかへり侍りしを、このあたりの人々、あはれに思ひ、土中につきこめ、そとばをたてゝ、せうみやうねんぶつをもつて、とふらひ奉るなり」とそ申ける。

ひめ君、このよしほのきゝ給ひて、「あつ」といひて、たふれふし給へは、しのふ、あまりのあさましさに、いたきをこし（11ウ）奉り、「これはいかなる御事そや。人もこそあやしめ奉るへきに」とて、やう〳〵にすかし侍りけれとも、ひめ君は、さらに人めをもはゝかり給はす。天にあこかれ地にふし、をめきさけひ給ふありさまを、里人みまひらせ、「いたはしの御ありさまやな。さて、いかなる御人なれは、かほとになけかせ給ふそや」ととひ侍りけれは、しのふ、あまりのかなしさに、「これにわたらせ（12オ）給ふ人は、なき人の御めのとなり。みつからとても、おさなき人の、むまれ出給ふはしめより、てなれまいらせつれとも、かほとにはおもひ奉らさるに、わかき人とて、あなかちに、かなはぬ事をしたひ給ふことのはかなさよ」とて、ともに涙をなかしけれは、里人は見まいらせ、「けにあはれなる御ことかな。さりなから、いまはさのみなけき給ひそとよ。と（12ウ）てもかなはぬ御事なれは、御なけきをやめ給ひて、なき人のためとおほしめさは、たゝ一へんのねんふつをもとなへて、御あととふらひたまへかし」と、一とうに申侍りけれは、

ひめきみ、ことはりとやおほしめしけむ、二人ともに、つかのほとりに立より、「さほとにくはほうすくなき人ならは、何しに世にはむまれ出給へるそや。（13オ）うらめしの御ことや。さりなから、世になしものゝなからへて、うき目をみ給はんよりも、中〳〵につゆときえはて給ふは、まさりけれとも、みつからをすて給ふては、さこそめいとのたびのそら、をそろしくおほすらん。しはしはまたせ給へとよ。やかて御とも申さん」と、なく〳〵なきくときの給へは、しのふ、このよしきくよりも、「こはあさましの御事やな。（13ウ）わか君こそ世にましまさすとも、すけ殿の御ゆくゑ、いまたしろしめしさためすは、身をなきものにし給ふ事、ゆめ〳〵あるへからす。たとひ、さりとも、としおひ給へるちゝ御をのこして、さきだたせ給ふ物ならは、五ぎやくざいをは、なにとかし給ふへき。いのちたになからへは、たつねあふまほろしのつてもあるそかし。わか君をかなしく（14オ）おほしめさは、たゝいかにもして、御いのちをたはひ給ひて、すけとのゝ御ゆくゑを、たつねさせ給ふへし」と、なく〳〵申けれは、ひめ君は、「なにゝかゝりてか、つゆのいのちも、なからふへき心地もせす」とて、つかのほとりにふしまろひ、りうていこかれ給ひけり。（14ウ）

［挿絵・第三図］（15オ）

しのふ申ようは、「さのみ御なけき候ならは、人のおもはくも候へし。はや〳〵こゝを御しのひ候て、すけとのゝ御ゆくゑをたつねさせ給へかし」と、なく〳〵いさめまひらせけれは、ひめ君、ことはりとやおほしめされけん、なく〳〵つかのほとりを御立あるか、「さて、いつくをさしてゆくへきそ」との給ふを、しのふ、はからひ申やう、「ときは、今（15ウ）ふゆのはじめなり。北は、ゆきはやくふるくになれは、まづほつこくを御たつね候へきか」と申けれは、さらは、都をさしてのほるへしとて、いそかせ給ひけるほとに、賀古川につき給ふ。

その夜は、そこにやとをかり給ふか、たかさかの、おのへのかねにおとろきて、夢もむすばぬあかつきの、とりのこゑ〳〵きこゆれは、たひのやとりをたち（16オ）給ふ。一谷、ひえとりこえをもうちすきて、夜はほの〳〵とあかしのうら、むこ山おろしにすゝみの松原うちなかめ、いつかさて、恋しき妻のおもかけを、みかげのもりはこれかとよ、いまは世になくなり給はゝ、むなしきすかたをもとめづか、そなたよりゆかりの風やふくはらの、ふるき都もなつかしや、ゆきひらの中納言、とふ人（16ウ）あらはとよみ給ひし、すまのしほやのふゆの空、あれてさひしきはいだやと、われこふるくもゐにかけれこまのはやし、玉ならはつらぬきとめんはすのいけ、なににかけてか玉のおの、なからふへきとはとはねとも、けふまてはいくたのもり、こやのゝしゆくをうちすきて、おとにきくあしやのうらを見て、とをりいそかせ給へは、ほと（17オ）もなく、おとたかくうしほも波もともにひく、大もつのうらにつき給へは、のりすてたるあまふね、いそうつなみにゆられて、うきしつめるありさまを、みたまふにつけても、みつからのみ物思ふ身は、よもあらしと思へは、水のうへにさへこかるゝけしきは、あはれやと、涙にくれて立給ふ。

しのふ、なく〳〵申やう、（17ウ）「この所にしはし御やすみ候て、びんせんをうかゝひうちのり、川じりまてもつかせ給ふ

へし」と申ければ、ひめ君、きこしめし、「あのちいさき船にのらんよりも、中〳〵にいつくまても、かちにてこそあゆみゆかめ」とそのたまひける。（18オ）

［挿絵・第四図］（18ウ）

しのふ、なく〳〵申やう、「いや〳〵、ひめ君は、いまたこれより上るかいろのことをは、しろしめし候まし。ともかくも、みつからに御まかせ候へ」とて、うらのとまやにやとをとり、なにはのうらまて、びんせんこうてうちのり、みつのはまにあかりけり。名にしおふ、にほひもよもにあまねき、なにはのむめのふゆこもり、（19オ）いまははるべにさくやこの花の、枝にはゆきもたははにて、しろくさける春かとそあやしまる。

それよりも、ひかしにをはるかにながむれは、たうばの、くもにそびえておかまれ給へるあり。ひめ君、「あれはいかに」と、とひ給へは、めのと、このよしうけ給はり、「あれこそ、上ぐう太子の御こんりう、仏法（19ウ）さいしよのてんわう寺と申からんにて侍る」と、申まいらせけれは、ひめ君、「さらは、かゝるつゐてなくては、またおかみ奉らんこともありかたけれは、末世のちぐうにも、さんけいし奉らはや」と、のたまひけれは、しのぶ、「さらは、いそかせ給ひ候へ」とて、あしにまかせてゆくほとに、いまみやのしゆくをうちすきて、ゆくもと（20オ）まるもあふさかの、しみづにうつるかけみれは、やつれはてたるすかたかな、それよりも、天王寺にまうでゝ、七ふしきのありさまて、こと〳〵くおかみめくり給ふ。中にも、かめ井の水のきよきなかれ、ぢよくせのいまも、たえすにこらす、太子の御ほんぢをあらはせる、こんだうののきにさゝれたる、ふたまた行こうはふる（20ウ）とも、色はかはるまし。さいもんにのそみ給ひて、にしをはるかにみ給へは、夕日うみにかゝやきて、しやうじゆらいかうのみきはにことならす。むかし、しやかによらい、てんほうりんの所とも、この寺と申へし。

それよりも、あべ野をへて、すみよしにまうて給ふ。この明神と申は、あふきか原よりあらはれ出給ふ三神のすいしやく、ち（21オ）くぜんのなかのこほり、ながとのくにのとよら、つのくににてはつもりのうら、三こく一たいの御神、いこくをたいぢし給ひしかは、しやだんのかまへもことさらに、にしをまもらせ給ふとかや。

むかし、このうらに、よしさだといへるたみありしか、さる事ありて都にのほり、久しく古郷にかへる事もなかりしかは、つまの女ばう（21ウ）まかれ、つゐにはかなくなりにけり。よしさた、このよしきゝつけて、いそきて古郷にかへるほとに、道に一つのかはづありて、よしさたかさきへはひありくを、なに心もなく思ひしに、いさこにかはづのはふたるあとをみれは、一首のうたなり。

すみよしのはまのみるめしかはらねはかりそめ人に（22オ）
またとはれける

とかきあらはし、かはつは、いつともなくうせにける。さてこそ、わかれしつまのまほろしとも思へり。水にすめるかはづまて、歌をよめるためしには、これをせうこに申なり。

それよりも、さかいのはまにたとりゆき、めい所きうせきうちなかめ、その夜はそこにそあかされける。夜もほの〳〵と（22ウ）あけければ、ならのかたへおもむき、めい所〳〵をうちな

かめ、恋しき人のゆくゑをも、たつねはやとおほしめして、ひんかしの山のふもとにつき給ふ。「これよりならのみやこへは、いかほとか侍る」と、ある所にてとひ給へは、「くらぎたうげとて、三里のなんじよの候へは、けふのうちには、とをり給ふことは、思ひもよらぬ事也」とそ、申ける。(23オ)

［挿絵・第五図・欠］(23ウ)

姫君はきこしめし、「このほとのたひのつかれに、三里ある山みちを、いかにとして、けふのうちにこゆへきとも思はねは、けふはこの所にとゝまり、あけなはとくしゆく所を出て、山中をこえはや」とのたまへは、「しかるへし」とて、その夜はそこにやとをかり給ふ。せきちのとりも、こゑ〳〵につけわたり、夢もむすはす、夜も(24オ)あけしかとも、名さへくらかりたうげなれは、おつる涙にかきくれて、道のくさ葉の色みえす、山中三里をうちすくれは、おとにきこえしかすかなる、みかさの山も見えわたる。それをしるへに、たとろ〳〵とあゆみ行給へは、ろくやをんをうつせる、かすか野につき給。

此野辺をあづま野とも申、または、とぶひのともいへり。(24ウ)あつまのと申事は、むかし、春日の四所明神、ひたちのくにかしまより、ならの都へうつり給へる時、むさしの国の住人、御とも申て上りけるか、つゐにはかなくなりけるを、すなはち、かすか野にとりおこなひ、土中につきこめしに、そのつかより、紫一もとおひ出たり。これなんゆかりの草とて、あとの代まても、かのものゝしそん、し(25オ)たひかなしみけるとなり。

むらさきの一もとゆへにかすかのゝ草はみなからあはれとそ思ふ

とよめるは、此心なるへし。

また、とぶひ野と申ことは、しがの都に、うぢたけといへるもの、みめよきむすめを一人もちけり。又、ならの京に、色このみのおのこあり。この女はうをこひかなしみけれは、たがひに思ひはかよはしけれとも、二人のおや、(25ウ)ゆるさゝりけれは、つゐにあひあふことかなはすして、月日ををくりけるか、その思ひのつもりにや、おつとは、正月(むつき)の二日に、はかなくなりにけり。女もまた、おなし日、ならの都にて、むなしく成しを、此のべにてけふりとなす。女のけふりは雲となり、しかのかたへなひき、おつとのけふりも雲とへんし、此のへに来て、そひえたり。(26オ)さてこそ、此野へを、とぶひのとは申なり。歌に、

ひばりあがるとぶひの原にわれひとり野もせにさけるつみれをそつむ

とよみしは、これなり。むかしかたりのきうせきなれとも、みるにあはれそまさりける。

去程に、古郷を出し事、きのふといひ、けふとくらして、あすか川七瀬のよどにたひねして、衣うつ音は枕に、すかはらや、ふしみの里に付給ふ。(26ウ)

［挿絵・第六図］(27オ)

こゝにして、しのふかゆかりの人のすみ所をたつね、しはらくたひのつかれをやすめ給へり。さて、都には、中宮(ちうくう)御さんのけおはしますとて、こゝのへのきせん、さはぎのゝじる事ありけり。さきより御なうのけおはしますうへに、御物のけさへうちそひて、御さんたいらかにあるべうも見え給はねは、みかと

の御なけきは（27ウ）申すにおよはす、ちゝの左大しん、物も心にいらすして、いかゝはせんと、あきれ給ふ。

神々寺々へ、御ぐはんしよをまいらせ給ふ事、御つかひひきもきらす、いし、をんみやうじの、まいりつとひたるありさまは、市人よりもおひたゝし。なんとほくれいよりも、きそうかうそうをしやうし、大ほうひほうのこる所なく、おこなはれしかとも、（28オ）きさきは、御くるしみの、やすまらせ給ふとも見えす、さが野のはらのをみなへし、つゆおもけなる御ありさま、みるにあはれそまさりける。

左大臣、だいりにまいりて、そうもん申されけるようは、「きさきの御さん、へいあんの御ためとて、大法ひほうのこる所なく、おこなはせ侍れとも、かつてそのしるしも見え給はす。されば（28ウ）は、たにんのなけきをやめ給はゝ、御みつからの、よろこひともなり侍るへきと、そんし候。かの、させるつみもなくして、なかされたる人々を、大しやおこなはれは、はかりなき御きたうとなり、わうじ御たんじやううたかひあらし」と、申されけれは、みかど、けにもとおほしめし、る人御しやめんあるへきよしの、御りんしをあそはし、（29オ）左大臣にたひけれは、左大臣、おほきによろこひ、ちよくしをえらみて、御りんしをあたへらる。

ちよくし、すてにかどいでして、はう〳〵へむかひける日、御さん平安に、わうじ御たんじやうあるそ、ふしきなる。みかとのえいかんあさからす、左大臣の御心のうち、おもひやるへし。

去程に、月日みちけれは、くに〳〵より、なかされ人（29ウ）とも、こと〳〵く都にかへりのほり、ほんくはんにげんぢうし、ふしのよろこひ、ふうふのむつひ、あさからさりし所に、はりまのくにゝなかされたる、たんごの右兵衛佐としすゑの朝臣は、いまたそのさたなかりしかは、ちゝ中なこんとしまさ卿、おぼつかなく思ひて、左大臣のもとにまいりて、なけき給ひけれは、左大臣あはれ（30オ）とやおほしめしけん、かさねてそうもんをへて、かのとしすゑをあつかりし、ひらのゝ左ゑもんかねとしかもとへ、御たつねありけれは、かねとしは、「わか身のうへにわさはひきたれり」と、大きにおとろきさはきつゝ、はう〳〵をてわけして、あひたづぬる所に、とりわけわか身は、やまとかはちをたつねんとて、みなみのくに（30ウ）におもむきけるか、かすか山、ならのふるき京（みやこ）につきて、かなたこなたをたつねめくる折ふし、兵衛佐としすゑは、くまのゝしんぐうにおはしましけるか、さゑもんのおとゝに、四郎かねみつと申もの、はしめよりなさけふかきものにて、すけ殿のなんぎの時も、ひそかにおとしまいらせし事なれは、御ゆくゑをよくしりたり。（31オ）

是によりて、まづしんぐうにこえて、すけ殿にたいめし、このよしを申きかせ奉り、やかて御とも申て、のほるほとに、ならの都にて、左衛もんかねとしにゆきあひ給へり。たかひに是をよろこひ、日比の事ともは、わすれ給へり。

それより、あしにまかせてのほり給ふほとに、すかはらや、ふしみの里に付給へは、たそかれ（31ウ）時にもなりにけれ。こよひはこゝにくさまくら、かりねの夢をむすひ給ふ所に、すけ殿の御まくら、上人ひめ君立よらせ給ひて、のたまふやう、

「みつから、あまりに御こととのゆかしさに、跡をしたひ、此しゆくまてうかれ参りて候」と、のたまふとみえて、やかて御ゆめはさめにけり。

夜もあけけれは、すけとのは、左衛もん殿にのたまふよう、（32オ）「こよひ、ふしきのゆめをみて候へは、この里に、もしたひ人やある。たつねてみ給へ」とありけれは、左衛もん、「うけ給はる」と申て、しやていの四郎かねみつを、いへ〳〵にまはらせ、たつねさせられける所に、ある所に、上らふ女はう、人をしのぶていに見えて、たゝ二人やとらせ給ふを、よく〳〵みれは、てる日のひめ君なり。

かねみつ、あまりのうれしさ（32ウ）に、声をあげてよひ奉りけれは、ひめ君もしのふも、「こはいかに」とて、あきれてこそは立給へり。かねみつ、しか〳〵のよし、申けれは、ひめ君は、「いかにして、ちゝ御にあひたまへるへし」とて、なき給ふより外はなし。されとも、兼光は、なさけふかきものなれは、よう〳〵にすかしまいらせて、ともなひてかへりけれは、すけとのも、ちゝの左衛もんも、「この上のよろこひ、（33オ）またあるへしともおもはれす」とて、ひめ君にいたきつき、よろこひ給ふ事かきり○。

それよりも、すけとのは、いそき都にのほり給へは、ちゝの中納言、むかへてよろこひ給ふ事、申はかりはなし。やかて、ふし二人ともなひ、左大臣殿へ参り給へは、左大臣殿、出あひ給て、このほとのたひやつれにて、さんかいのちんぷつ、（33ウ）こくとのくはしをそろへて、しゆをさま〳〵にすゝめ給へり。（34オ）

［挿絵・第七図］（34ウ）

そのゝち、兵衛佐、はしめおはりのことゝもを、左大臣殿へ申させ給へは、やかて、みかどへそうもん申。こくし中将きよつなをは、るざいにもおこなふへしと、せんじ有けれとも、すけ殿は、せんじを返し奉り、「あたをはをんにてほうずべし。けふは人のうへ、あすは我身のうへとなる世のならひなれは、人にうきめみせて（35オ）なにかせん」とて、かたくじし申されけれは、みかと、えいかんなのめならす。としするをてん上にめされ、やかて三位中将になされ、はりまのこくしを給はりけれは、としするゑ、あさからすよろこひて、ばんしうに下らせ給ふか、ひめぢと申所に、やかたをたて、かのてる日のひめをむかへて、みだい所とさだめ給ふ。

これにつけ（35ウ）ても、わか君の御ことをふかくなけき、かなしませ給ふ所に、四郎かねみつか申けるやうは、「せんこくしへわたし申たるおさあひは、いやしきものゝ子なり。かの夕しほ君は、道のほとりに捨をきしを、その夜、やかてひろひたる人の候へは、たゝいまにもその御ゆくゑはきこゆへし」と、申侍りけれは、二人の人々、よろこひの色をなし、こく（36オ）中をたつね給へり。

こゝに又、ひめ君の御めのとの女はうは、やしなひ君を見かきりて、世をうき物におもひ、法花寺のふもとに、しゆつけをとげてゐたりしか、道にていつぞやひろひたるみなじ子は、まさしくわか君夕しほ殿○、あけくれそだてて、人となし奉りける所に、すけ殿、こくしとなり給ひ、ひめ君みだい所と、（36ウ）いつきかしつかれ給ふよしをきゝしかは、おほきによろこひ、

かのわか君をいたきて、こくしのやかたへまいりける。
　こくしもひめ君も、此わか君を見給ひて、「ゆめかうつゝか、おほつかなのありさまや」とて、いたひ付てそよろこひ給ふ。いま思ひあはすれは、めのとかわれをいさめし事、一々そのいはれあり。そのうへ、わか君を（37オ）おほしたてまいらせしこゝろざし、たぐひすくなきしだいなれは、先よろこひのはしめとて、こかぬ千両、まききぬ千ひき、よね千ごくを給はりけり。めのと、これをてうだいし、しんるいきやうだいにあたへて、一ごゑいぐはにほこりけり。
　こくし中将殿は、かねみつを御まへにめされ、「われ二つなきいのちをまたくす（37ウ）るによて、かゝるさいはひにあふことも、ひとへになんぢかをんどくなり。をんをえて、をんをしらさるは、きちくぽくせきにおなしけれは、よきにけんしやうまいらすへし」とて、しかまつと申所をはしめとして、千町のしよりやうを給はりけり。
　ちゝ（ひめか）のさゑもんは、こくしをうとみしものなれとも、かたきの中将きよつなをさへ、（38オ）そのとがめもなきうへは、まして、ひめかちゝの事なれは、あしくはからふへきにあらすとて、すか所のをんしやう給はりて、おひのえいぐはになこりけり。たゞ人にはなさけあれ、なさけは人のためならぬとかや。かやうのためしを思ふときは、かりそめの文、玉つさにかよはす心さしも、いもせむすふの神の御はからひな（38ウ）れは、末の世の人、おぼろげには、おもふべからす。
　はじめ、しのぶか中だちは、いたづらことにきこえしかとも、しのぶか空ことなかりしかは、左ゑもんのむすめは、こくしのみだいにそなはらんことかたし。たゝ何事も、ぜんぜの事なり。この世はかりのはうべんと、おほしめさるへからす。（39オ）